

人さまのために働きたい。

高岡教会 中山雅史さん

中山雅史さんは、繊維製品卸売の会社に26年間勤務し、営業部長を任せていた。その会社は平成14年9月に倒産。300軒ほどの取引先に頭を下げて回ったが、苦情をいわれることはほとんどなく、逆に心配してくれる方が多くいたそうだ。中山さんは、感謝の思いで胸がいっぱいになり、同時に、営業部長という役職にあぐらをかき、日々の業務を惰性でこなしていたこと、お客様を敬う心が薄れていったことに気づく。約一ヶ月にわたるお詫び行脚は、自分の生き方を見つめ直し、働く姿勢をあらためる機縁となったのだ。倒産してから二ヶ月後、多くの方の支援を受け、新会社を設立。以来18年、人と人とのつながりを大切にする姿勢で忙しい日々を送っている。そして、これからも「仕事をとおして人さまのお役に立ちたい」と目を輝かせている。



卑怯な一面があるということです。
法華經の「嘱累品」では、「みんなが幸せになれるよう、どうかみなさんに法華經の教えを伝えてください。よろしく頼みますよ」と仏が菩薩に託しますが、どのようなときも、仏が菩薩を見るように人を見て信頼できたら、どれほど心が安らぐことでしょう。信じて任せきる仏のように、人を見ることができる、信じられるというのは、それだけで大きな功德をいただいているのです。

私たちには、だれもが凡夫の心をもっています。人の好き嫌いに左右されたり、噂や偏見に基づくレッテルを貼つて人を評価したりしがちです。しかし、それでは仏の立場で人を見ることにはなりません。「悉有仮性」——生きとし生けるものはみな、仏と同じ本質を具えていると学びながら、凡夫の視点にとどまってしまうのは、信心がそこにまで至っていないということです。

また、もしみなさんが、何かしらのレッテルを貼つてだれかを見ているとしたら、そのレッテルと同じものが自分にもあると省みることも大切です。「あの人は卑怯者だ」と見る自分にも、

信じて任せる心